

子どもが自分らしく遊ぶことのできる保育実践

—子どもにとって幼稚園が「居場所」となるまで—

中村 共芳 [鹿児島大学教育学部附属幼稚園] ・ 河津 花奈 [鹿児島大学教育学部附属幼稚園]
中津野 春菜 [鹿児島大学教育学部附属幼稚園]

Implementation of childcare which allows children to play as who they are: Roadmap of a kindergarten becoming a “homeground” for children

NAKAMURA Tomoka ・ KAWAZU Kana ・ NAKATUNO Haruna

キーワード：幼稚園教育、居場所、子ども、遊び

1 はじめに

明治12(1879)年4月創立の本園は、全国で2番目に古い歴史をもつ幼稚園である。今年度は、年少組20人、年中組36人、年長組36人、計3学級92人が在籍している。

研究主題に「『遊ぶ子ども 学ぶ子ども』を育む保育を目指して」を掲げて、本県幼稚園教育向上のため、学部と連携し研究や実践を公開するとともに、親と子がともに育つ場としての幼稚園を目指している。

2 「自分らしく遊ぶ」とは

幼稚園における教育は遊びを通しての指導を中心に行うものである。幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれており、遊ぶこと自体が目的である。とはいえ、子どもたちは幼稚園に在籍したからといってすぐに遊ぶことができるわけではない。初めは、保護者と離れる不安や、新しい環境への戸惑いなどを感じながら登園するため、自己発揮しながら好きな遊びをすることが難しい子どももいる。幼稚園で遊ぶためには、子どもにとって園が「ここは遊べる場所、自分の居場所だ」と安心できる場である必要がある。そうして初めて子どもは自分らしく遊ぶことができるのである。子どもが幼稚園を居場所と感じ、自己発揮しながら好きな遊びをすることを「自分らしく遊ぶこと」と捉え、子どもたちが自分らしく遊ぶための実践を、幼稚園を自分の居場所であると感じるまでの様子を中心にまとめた。

3 保育実践

(1) 門「幼稚園への一步」

居場所=自分の存在を受け入れてくれるところ

(教師の思い)

環境を整えたり、笑顔で迎え入れたりすることで、子どもが「幼稚園に来てよかった」「また明日も来たい」と思えるような幼稚園でありたい。

子どもの姿・言葉
<p>【登園時】</p> <p>副園長「おはようございます。お、その帽子似合っているね」</p> <p>子 「おはようございます」(副園長とハイタッチをして入る)</p> <p>子 (にこっと笑って入る)</p> <p>教 「おはようございます」</p> <p>子 (母親に促され小さな声で)「おはようございます」</p> <p>【降園時】</p> <p>副園長「さようなら」</p> <p>子 「さようなら」(ハイタッチをして帰る)</p> <p>子 「先生、高い高いして」</p> <p>○ 副園長に高い高いをしてもらってから帰る子どもの列ができる。</p> <p>子 「副園長先生、また明日もしてね」</p>

(考察)

子どもたちが気持ちよく登園できるように、朝、門周辺の清掃活動を行っている。子どもたちの目には触れず知らないことではあるが、一日の始まりをすがすがしい気持ちでスタートしてほしいと考える。

副園長をはじめ職員は、登降園時に正門に立ち、子どもたちを迎え見送っている。毎朝、笑顔で「おはようございます」というあいさつをすることに加え、「帽子、とっても似合っているね」など子どもへのさりげない言葉を添えることで、ちゃんと自分を見てくれているのだという安心感を得ることができると考える。新学期当初は、職員に対して距離をとり、保護者の後ろに隠れるようにして登園していた子どもが、いつの間にか「おはようございます」と答えるようになった。その姿に保護者も驚き、うれしそうに「初めてあいさつできましたね」と副園長に話しかけ、副園長と保護者が子どもの成長を共有することができた。毎日同じ人が笑顔で迎えてくれるということは、子どもたちの「今日も幼稚園に来たぞ」と安心感につながっていると考える。

また、降園時、副園長に「高い高い」をしてもらう子どもの姿がある。新学期当初、朝なかなか保護者から離れられない子どもが求めたことから始まった。それから毎日の日課となり、してもらった後に「副園長先生、また明日もしてね。」と言って帰っていく。「また明日も」という言葉が自然と子どもから出てくるということは、子どもにとって幼稚園に来ることが当たり前のことになり、ここは自分の居場所であると思えるようになったことを意味すると考える。

(2) 年少児クラス「幼稚園って楽しいな」

居場所＝先生、友達がいることで安心できるどころ

(教師の思い)

4月。新入園の20人の子どもたちが登園してきた。初めての集団生活を送る年少児の子どもたち。保護者と連携して、子どもの気持ちを受け止め、ゆっくり見守っていきたい。幼稚園が安心できる場所になり、楽しく登園できるようになってほしいな。

子どもの姿・言葉

【1日目】

- 母親に抱かれて、指をしゃぶり、周りをうかがいながら登園する。母親と離れがたかったため、しばらく一緒に過ごすことを提案した。

教 「Aくん、支度が済んだら、遊んでいいんだよ。お母さんも一緒に遊ぶからね。」

- A児が砂遊びに夢中になっているときに、何度か母親は少し離れようとするが、すぐに気付いて後を追いついていく。教師は、無理に引き離そうとはせずに、母親に降園活動まで一緒に過ごしてもらった。

【3日目】

- 少しずつ母親と離れて過ごし、幼稚園は安心して過ごせるところだと感じられるようにしていきたいことを、保護者にも伝えた。



- 砂場で遊んでいるところに、教師も入って一緒に遊び、しばらくして、母親に離れてもらう。

A 「ママ！ママ！」（母親を求めて、泣き始める）

教 「Aくん、ママはすぐに迎えに来るからね。それまで、先生と遊んでいよう。」

- 教師はA児を抱きかかえて、絵本を読み始めた。周りには、年少児の子どもたちも集まって、一緒に絵本を見ている。A児は、少しずつ落ち着いて、絵本をじっと見つめている。

教 「Aくん、一緒にお散歩しようか。」

- 絵本の後は、園庭を散歩し、花をつんだり、うさぎを見たりして楽しむ。教師の姿が見えなくなると、教師をさがす様子も見られたが、少しずつ笑顔が見られるようになってきた。

【1週間後】

- 母親と保育室前で立って別れる日が続いたが、ある日、門から一人で保育室まで歩いてきた。

教 「Aくん、おはよう。すごいね。一人で来たんだね。」

A 「うん。」（にこにこしながら、教師に近づいてきた。）

教 「すごい。」（A児を抱きしめる。）



- A児は、自信に満ちた顔で一人で支度を済ませた。

A 「ねえ、先生、お散歩行こう。」

教 「そうだね。みんなで、お庭をお散歩しよう。」（数名を誘って園庭の散歩に行く。）

- A児は、教師を求めてくるようになり、一緒に過ごすことを楽しむようになってきた。



【1か月後】

A 「ねえ、先生、〇〇くんは？まだ来てないの？」

教 「まだ来てないね。あつ、〇〇くん来たよ。」

A 「〇〇くん、遊ぼう！」

- A児は、教師と、一対一の関係から、友達存在に気付き、一緒に遊ぶようになるようになった。

(考察)

入園当初の子どもたちは、幼稚園の生活を楽しみにし、喜んで登園してくる子どもたちも多いが、中には、母親と離れがたい子どももいる。教師は、そんな子どもたちの気持ちを受け止め、寄り添いながら、少しずつ、幼稚園は安心して過ごせる場所であることを感じてほしいと考え、保育を行った。

A児は、入園前に保育所に通っており、集団生活が初めてという訳ではなかったが、初めての幼稚園に強い不安を感じていた。言葉数も少なく、母親に抱かれて、母親の髪や自分の指をしゃぶることで心の安定を図っている様子が見られた。しかし、保護者によると家庭では、幼稚園であったことや教師と遊んだことなどをうれしそうに話していたようである。そこで、A児の気持ちを受け止めながら、少しずつ母親と離れて過ごす時間を増やしていきたいと考えた。

始めは、母親の姿が見えないことに強く泣き続ける姿も見られたが、教師は、A児を抱きながら、「大丈夫だよ。遊んでいれば、必ずお迎えに来てくれるよ。」と何度も伝えた。そして、落ち着いた頃に「何して遊ぶうか。〇〇しに行こうよ。」と声を掛け、幼稚園は楽しく、安心できる場所だということを感じてもらえるようにした。

一週間もすると、門のところで母親と別れ、自分から進んで登園してくるA児の姿が見られるようになった。教師はA児の姿を認め、抱きしめて一人で歩いて登園できたことを一緒に喜んだ。A児にとって少しずつ幼稚園は安心して登園でき、楽しいところだと感じられるようになったと考えられる。

当初は、教師と一対一の関係を求めていたが、教師を介して友達と遊ぶことを通し、徐々に同じクラスの友達の存在にも気付き始めた。友達と一緒に手をつないで遊んだり、弁当の時間など隣に座ったりして友達との触れ合いも楽しめるようになったことで、さらに、「幼稚園は楽しいところ」という安心感が広まったのではないかと考えられる。

初めての集団生活を送る年少児にとって、「幼稚園は楽しい。一緒に遊ぶ友達や先生がいる」ということが安心感につながり、幼稚園が自分たちの居場所になっていくと考えられる。家庭という自分の居場所から飛び出して、幼稚園というもう一つの居場所をつくっていくという、その子どもたちの大きな一歩に、教師は寄り添い、子どもたちの気持ちを受け止めながら、援助をしていくことが大切であると考えた。また、幼稚園の方針や子どもたちの様子、成長を家庭に伝え、家庭と共通の認識のもと、保育を行うことで、子どもたちの大きな成長につなげていきたいと考える。

(3) 年中児クラス「僕はスーパーマン」

居場所＝共通の道具を通して友達と遊ぶことのできる場所

(教師の思い)

B児は母親と離れるときに涙を流してしまう。B児が好きな遊びと一緒に加わりながら、幼稚園で遊ぶことの楽しさを感じてほしいな。

子どもの姿・言葉

【4月】

- 門で母親と離れることができず、一緒に保育室まで登園し、母親に見守られながら朝の支度を済ませる。その後母親が帰ろうとすると泣いて抱きつく。母親は、しばらく抱きしめた後、教師にB児を託して帰っていく。B児の涙は一旦止まるものの、時折思い出しては涙を流す。

教 「何をして遊ぶ？」

B 「・・・」

- B児は教師の後について、教師が加わる友達の遊びを見て回る。

【5月第2週】

- 別れ際の涙は続いているが、思い出して涙を流すことはほとんどなくなった。クワの実で色水をつくったり、折り紙で虫を折ったりと、教師から離れて好きな遊びをして過ごすことが増えてくる。時折、「先生、見て」と見せにくるなど、教師と好きな遊びを行ったり来たりして過ごす。

【6月第2週】

- 少しずつ、一人で門から登園できる日も見られるようになってくる。ある日、友達がカラーポリ袋をマントに見立てて、身にまもって遊んでいる姿を目にする。

B 「僕もマントがほしい。青がいい」

- 教師からマント受け取り、それをまとう。「スーパーマン」と大きな声を出しながら同じくスーパーマンになった友達とたたかいごっこをしたり、園庭に出て綱ぶらんこをしたりする。片付けのときには丁寧に畳んで自分のロッカーにしまう。
- 翌日、母親の手を離れ、一人駆け足で登園したB児は、支度を終わるとすぐにマントを取り出し、身にまもってスーパーマンごっこを始める。友達と一緒にスーパーマンになりきってたたかいごっこをしたり、綱ぶらんこをしたりする。



(考察)

年中で入園したB児は、朝、門で母親と離れることができなかった。そして母親が帰ろうとすると泣き始め、少し遊び始めても、途中で母親が恋しくなって涙を流していた。母親と話をしたところ、それまで2年ほど別の幼稚園に通っていたが、母親との別れ際はずっと涙を流していたとのことであった。

そこで、まずは教師と一緒に過ごす中で安心して過ごすことができるようにした。一緒に折り紙をしたり、園庭を散歩したりして、一緒に過ごしながら他の友達の遊びの様子などを見て、「〇〇くんは箱で舟をつくったんだって。Bくんもする？」と声を掛けながら興味のあるものを見つけようとした。すると徐々に自分から折り紙や工作、外で木の実を拾うことなどを始めるようになっていった。

そこから、たくさん遊べた翌日はスムーズに登園し、あまり遊べなかった翌日は少ししぶるようになった。教師は、B児が興味を示す遊びや楽しいと感じている遊びが少しずつ分かるようになり、興味のある遊びがもつとできるように意識して言葉を掛けるようにした。

ある日、カラーポリ袋をマントにして遊び始めた。片付けの時間になると、大事に畳んで自分の引き出しに

しまう様子から、スーパーマンになりきって遊んだことが楽しかったことが分かった。その次の日からもB児は涙を流すことなく一人で登園し、朝一番はまずマントをつけて遊ぶという流れができた。教師は、B児が友達と外へ飛び出し「空を飛ぶ練習」といって綱ぼらんこを漕ぎに行く姿を「スーパーマン、いってらっしゃい」と見送り、安心して遊び始めることができるように意識して言葉を掛けた。また、マントが濡れてしまったら「ここで乾かしたら」と言葉を掛けるなど、B児がマントを大事に思う気持ちに寄り添い、大事に扱うように心がけた。

マントを身に着けて遊んだことがとても楽しく、「またスーパーマンになって遊びたい」という気持ちにつながり、駆け足での登園になったのである。また、毎朝繰り返しマントを身に着ける姿から、マントはただの道具ではなく、「マントを着けたらスーパーマンになれる」「マントをつけたらスーパーマンだから大丈夫」といった、幼稚園で遊ぶための安心材料であったのだと考える。

B児はその後、スーパーマンになりきることで友達とのかかわりを深めながら、他の友達や遊びにも積極的にかかわるようになり、大きな声を出して遊ぶようになった。教師として、B児が自分らしく遊びを進める姿を見守りながら、更に友達とのかかわりや遊びを広げたりすることができるように援助していくことが大切であると考ええる。

(4) 年長児クラス「当番活動、楽しみ！」

居場所＝自分の役割があるところ

(教師の思い)

子どもたちは当番活動を楽しみにしている。幼稚園で一番年上である子どもたちが、当番活動にやりがいを感じ、自分の役割を果たす達成感・充実感に共感していきたい。

子どもの姿・言葉

○ まだ、片付けの時間になっていないのに、片付けを終わらせて保育室で一人、C児が時計を見ながら落ち着かない様子でそわそわしている。

教 「C君どうしたの？まだ、遊んでもいいんだよ」

C 「ぼく、今日はお当番で机を拭かないといけないから、いつもより早く片付けを終わらせたの。早く、お弁当の時間にならないかなあって、待ってるんだ」

教 「そっかあ。今日はC君お当番だもんね。お当番の仕事楽しみにしていたもんね」

C 「ぼく、お当番で机を拭くのは初めてなの」

○ C児は、時間になると布巾で丁寧に机を拭く。

教 「C君が拭いたところ、とてもきれいになったね。ありがとう」

○ 好きな遊びの時間、D児が教師に話しかけてきた。

D 「先生、わたしもう今日のお当番の発表で何を言うか決めたよ」

教 「すごい。Dちゃん、もう決めたんだ。何を言うの？」

D 「あのね、〇〇ちゃんと虫捕りしたことを言おうと思って」

教 「おお、いいね。たくさん捕まえられたもんね。発表がんばってね」



○ 降園時、D児が当番として、虫捕りが楽しかったと発表する。

教 「Dちゃんは今日たくさん捕まえられたんだよ。すごいよね。また明日も捕まえたらみんなも見せてもらったらいいね」

(考察)

4月当初、憧れの年長児になり、新入園児に優しく声を掛け一緒に遊んだり、幼稚園のきまりを教えたりと、はりきってお兄さん・お姉さんをしている姿が多く見られた。子どもたちは年中の頃に、年長児が当番活動をする姿を様々な場面で目にしている。「うみ組さんになったら、お当番でみんなの前に出るんだ」と憧れを抱き、当番活動を楽しみにしていた。進級すると早速、「先生、お当番はいつから始まるんですか」と聞いてきたり、「早くお当番がしたい」と、教師に訴えたりする子どもが多数いた。

そんな年長児にとって当番活動は特別なものであり、幼稚園で一番大きくなった自分、頼られる存在になった自分を味わうことのできる活動になっていると考えられる。

そこで、教師は、「お当番をがんばりたい」「お当番が楽しみだな」という子どもたちの思いを受け止め、当番カードを分かりやすい場所に掲示したり、降園時に次の日の当番を知らせたりするなど、子どもたちが当番の活動にスムーズに取り組めるように援助してきた。

年長児になると、園生活にも慣れ親しみ、「今日は、どんな遊びをしようか」「誰と遊ぼうか」と期待を膨らませながら登園し、それぞれが好きな遊びを見つけ、のびのびと園生活を楽しんでいる。そのような年長児の姿からは、幼稚園を自分の居場所だと感じ、自分らしく遊びを進めている様子がうかがえる。さらに、当番活動をすることで、好きな遊びをしながら発表することを考えたり、当番の仕事を早くするためにいつもより片付けをがんばったりと、新たな姿が見られるようになった。当番活動で役割を任せられることは、新たな居場所となっていると考えられる。教師は、子どもたちの当番を楽しみにする気持ちや年長児としてがんばりたいという気持ちを大切に、達成感や充実感が感じられるように言葉を掛けたり、励ましたりしながら、年長児としての意識を高めていきたいと考える。

(5) 保健室「先生の手は魔法の手」

居場所=いざというときに安心して過ごせるところ

(教師の思い)

保健室は、子どもの気持ちが落ち込んだときに「ここに行けば大丈夫」と思えるような場所でありたい。

子どもの姿・言葉

○ 保育室で友達とぶつかってしまった年少男児E児が涙を浮かべ、担任に連れられて保健室へ入室する。養護教諭が腹部を診たが、傷や腫れは少しもなく、大事はないと判断する。

教 「お友達とぶつかってびっくりしたね。でも大丈夫だよ」

E 「・・・」(涙は止まらない)

教 「Eくん、先生の手はね、魔法の手なんだよ。だから先生の手でよしよししたら、痛いのがすぐよくなるんだよ。」

○ 養護教諭がE児のお腹をゆっくりとなでる。E児は泣くのを止めて
養護教諭の手をじっと見つめる。

教 「どう？痛いよくなった？」

E 「・・・」(こくりと頷く)

教「そっか。じゃあもう大丈夫だね。気を付けて遊んでね」

○ 養護教諭が背中をそっと押し出すと、E児は駆け足で保育室へと戻っていく。



(考察)

本園には養護教諭が配置されており、子どもたちは体調不良を訴えたり、ケガをしたりした際に養護教諭に処置してもらうことがある。ケガ自体はなくても「保健室の先生に診てもらった」ということが子どもの安心感へとつながっていると考えられる。ケガを診てもらうと同時に心が落ち着くのである。

この事例では、E児にケガ等見られなかったため、養護教諭は医療的な処置は行っていない。行ったのはお腹をさすという行為である。これは目に見える傷を癒すのではなく、落ち込んでしまった気持ちを癒すための行為である。E児は保健室で養護教諭にお腹をさすってもらったことで、気持ちを持ち直し、再び遊び始めることができた。

養護教諭は保健室や養護教諭の果たす役割について次のように話す。「幼稚園で、担任以外に見てもらえる存在がいるということは、子どもにとって園が安心できる場所であることにつながるのではないかと。養護教諭として、傷を処置するだけでなく、子どもが再び遊び始めるための気持ちを落ち着けられる存在となり、保健室が『ここに行けば大丈夫』と思えるような場所でありたい。」

実際、上に挙げたような場面は、保健室では度々見られている。そのことから、保健室はただのケガの処置室ではなく、子どもにとって「ここで保健室の先生に診てもらったら大丈夫」という安心感を得られる場所になっているということがいえる。

4 おわりに

すべての実践の中で共通するのは、子どもが幼稚園を居場所と感じるには、安心感が必要であるということである。担任や副担任だけでなく、副園長や養護教諭などすべての職員が子どもの気持ちを受け止めることで、子どもたちは安心して過ごすことができる。教師との関係で得られた安心感に加え、友達との存在、友達と遊ぶことの楽しさに気付くようになる。また時には、これがあるから大丈夫、とお守りのような道具があることが、子どもたちの気持ちを強くしてくれる。さらに、年長児になると、当番活動という自分のやりがいを感じることで幼稚園へ登園する楽しさを高めてくれる。そうして教師や友達、時には道具を介して安心感を得た子どもたちは、「幼稚園は遊べる場所である」と実感し、自分らしく遊びを始めることができると考える。今後も、子どもの気持ちに寄り添いながら、保護者とも連携し、幼稚園が子どもにとって居場所となり、自分らしく遊ぶことができるようにしていきたい。

参考文献 ○「幼稚園教育要領解説」(文部科学省 平成20年)

○「幼稚園教育要領ハンドブック」(学研教育出版 平成20年)